

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「子どもの見方を変えて、味方になるう」

発達障害のある子どもに寄り添う大切な「ミカタ」より 鈴木 徹（秋田大学教育文化学部准教授）

1 問題行動の構造を知る

問題行動は、子どもと、支援者にとっての問題の二重構造になっている。

①給食のおかずをもっと食べたいことを要求する手段がなく、

②結果として大声を上げて教室を走り回ってしまう子どもがいたとする。

支援者は、②への対応について、どうしたらよいか考える。しかし、子どもは、①をうまく表現できないことが問題になる。

大声を出したり、教室を走り回ったりする行動を止めるか（支援者にとっての問題）という視点から支援を考えるよりも、イライラしないで「おかわりをしたい」という気持ちを表現するためにどのような環境調整ができるか（子どもにとっての問題）という視点から支援を考える。

子どもの視点から問題行動を捉えることで、問題行動を止める支援から、問題行動が起きない支援が可能になる。

他者に乱暴をしたり、授業中に離席をしたりする子どもがいる。しかし、行動には全て理由や意味がある。子どもの気持ちに目を向け、その理由を探るとともに、校内支援体制を整備しながら、保護者と情報共有することで、必ずいい方向に向かうと信じている。

2 子どもとの関係性を大切にする

園や学校で統一した支援は必要であるが、あまり型にはめてしまうと、逸脱しそうな子どもと周囲の子どもの関係性に悪影響を及ぼす。私たちが安全に運転ができるのは、ハンドルに遊び（ゆとり）があるからである。それは子どもへの支援にも通じる。支援の手順に固執しすぎると、子どもは逃げ場がなくなり、苦しくなる。支援の枠組みはしっかり整えながらも、少しストライクゾーンを広げてゆとりをもたせる。

子どもの数だけ支援方法はある。支援が子どもにとって有効かどうかは、子どもと支援者との関係性の構築によるものが大きい。子どもの特性に合わせた支援を行うことと同じくらい子どもとの良好な関係を構築することを大切にする。

3 子どもの思いを支援のゴールにする

支援者は「こんなふうに育ってほしい」という具体的な願いをもちながら、子どもの指導に当たっている。しかし、支援のゴール（目標）は、支援者の目線から決めるものではない。支援者が設定するゴールと、子どもが目指すゴールは必ずしも一致するものではない。子どもが何をゴールにしているのかを探る。何を思い、どうなりたいと考えているのか。支援者は子どもを観察したり、話を聞いたりして、ゴールを設定する。答えは子どもがもっている。



とれたて直送便



「尖った口調にならないように」 南 明奈さん（タレント）

相手がドアの鍵をかけ忘れたときに、「なんでまた忘れたの！」「ちゃんと鍵閉めて！」とぶっきらぼうな言い方をすると、向こうも嫌な気分になる。「また鍵開いてたよ、私が誘拐されたら嫌でしょう？」と柔らかい言い方で伝える。伝えると責めるは違う。相手の落ち度に、次から気を付けてもらいたいのであれば、穏やかな口調で伝えればいい。口調が尖ってしまうのは、非を責めたいという気持ちが強いため、それが相手を嫌な気分にする。責める気持ちは、相手の落ち度にかこつけて、ストレスによるイラ立ちをぶつけているだけが多い。子どもに何か注意する際は、毅然とした態度と、思いやりや気遣いが大切になる。